

I 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

国際日本学研究所の研究員が、総じて個々の専門的な研究活動を積極的に行っている点は極めて高く評価されるが、必ずしも「国際日本学研究所の構築と推進」という規程に掲げられている目標に直接結び付いていないように思われる。

「2015年度大学評価結果総評」にある「研究所の理念・目的に沿う研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないか」という指摘に対して、「2015年度大学評価委員会の結果への対応状況」で「新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる」と回答している。『(法政大学) 憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる』という方向性の中で『国際日本学』をどう位置付けるのかを検討し、プロジェクトを早急に立ち上げることにより、研究所の理念・目的に沿う研究がさらに推進されることを期待したい。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】(～400字程度まで)

大学評価委員会からは、前年同様、本研究所兼担所員各自の研究活動が活発に行われている点は高く評価していただいたが、それらが必ずしも本研究所の目標である「国際日本学の構築と推進」に結びついていないのではないかという指摘がなされ、研究所全体として新たなプロジェクトを早急に立ち上げてほしいとの希望がだされた。そこで本研究所としては、2017年度私立大学研究ブランディング事業にエコデザイン地域研究センターと連携して、「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」というタイトルにて申請することとした。内容的には、基層構造としての水都、江戸東京の「ユニークさ」、テクノロジーとアートからみた現代東京、都市東京の近未来といった4つの要素を掲げ、「江戸東京から持続可能な地球社会の未来へ」をめざすものとしている。すでに大枠としては学内的に合意を得られていて、6月8日に応募書類提出の段取りになっている。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

「2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」において指摘のあった「国際日本学の構築と推進」という研究所の理念・目的に沿う新たな研究の推進という点に関して、国際日本学研究所では、エコ地域デザイン研究センターと連携し、2017年度私立大学研究ブランディング事業に応募するという、積極的な取り組みがなされている。「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」をテーマに、両研究所の強みを生かしたものとなっており、今後に期待したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2016年度の現状

1.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

① 質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2016年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・ 質保証に関する委員会としては、毎月開催される研究所の運営委員会を宛てている。
学際的・国際的と言う研究様態そのもの、そしてそれに依拠し形成されている研究組織そのものが質保証のシステムであるといえる。具体的には、研究組織内では、アプローチ代表が、研究会等の報告を運営委員会で行い、別のアプローチ代表や兼担所員より指摘やアドバイス等を受けるという形式がとられている。また年に一度、総括的国際シンポを欧州日本学研究所にて開催し、国外の専門家からの評価を受けている。
- ・ また毎月の運営委員会に専任所員や他の兼担所員が、そこに積極的に参加して委員会が機能するよう工夫している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・ 特になし	

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

国際日本学研究所においては、毎月開催される研究所の運営委員会において、研究チームの代表が研究会等の報告を運営委員会で行い、別の研究チームの代表や兼担所員より指摘やアドバイス等を受けるといった形式で、質保証に関する検討が行われている。研究所という構成員の規模の制約はあるものの、独立性と透明性の確保といった点から、引き続き内部質保証の充実に向けての検討を行うことが期待される。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

1. 国際シンポジウム『人間の試練にさらされる〈自然〉』。2016年11月3日（木）－11月5日（土）。アルザス・欧州日本学研究所。「人間と自然」をシンポジウムの主題とし、日本側5名、欧州側4名の発表者が学際的かつ国際的に論じた。
2. 環境・自然研究会主催講演会『エコロジーの新たな展開／一人称エコロジーと自然の詩学』（エラスムス・ムンドゥス修士課程〈ユーロフィロソフィ〉法政プログラム2016）。2016年6月13日（月）18時30分から21時00分。法政大学ボアソナード・タワー25階B会議室。講師：ジャン＝フィリップ・ピエロン（リヨン第3大学哲学部教授、学部長）
3. 私立大学研究ブランディング事業申請ワークショップ等開催。
 - ・『情報共有の会』
2016年7月23日（土）15時から。法政大学ボアソナード・タワー25階C会議室。
 - ・『第1回ワークショップ』
2016年11月25日（金）14時から18時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。
 - ・『第2回ワークショップ』
2016年12月16日（金）16時から19時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。
 - ・『第3回ワークショップ』
2017年1月13日（金）13時30分から17時。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。
 - ・『第4回ワークショップ』
2017年2月24日（金）12時から14時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。
4. 公益財団法人日中友好会館所管の学際的総合研究の一環となるセミナー「後楽講堂」と本研究王敏研究室との共催講座。
 - ・『日本文学と中国の文化——宮沢賢治と西遊記』。2016年4月15日（金）20時から22時。日中友好会館後楽寮内。
 - ・『古代シルクロードへの旅人—日本の学問僧』。2016年5月13日（金）20時から22時。日中友好会館後楽寮内。報告者：楼正豪（浙江海洋大学東海発展研究院専任講師）
 - ・『国際日本学と国際中国学の交差点—日本における禹王信仰に関する調査を中心に』。2016年12月30日（金）20時から22時。日中友好会館後楽寮内。報告者：王敏（法政大学国際日本学研究所専任所員・教授）。
5. 平成27年度科学研究費若手研究（B）採択「戦前の民間組織による対外的情報発信とその影響：英語版『東洋経済新報』を例として（[研究課題番号:15K16987] 代表：鈴木裕輔）」、本研究後援研究会。
 - ・第4回研究会『「大正維新」、「昭和維新」とは何であったのか—出口王仁三郎の思想と行動を中心に—』。2017年8月1日（月）18時30分から20時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。報告：徐玄九（法政大学）
 - ・第5回研究会『パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造』。2017年2月24日（金）18時30分から20時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。報告：上品和馬（早稲田大学）
 - ・第6回研究会『戦後PRの移植と受容をめぐって』。2017年3月6日（月）18時30分から20時30分。法政大学九段校舎別館3階研究所会議室6。報告：河尻珍（東京大学）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

1. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20161103-05report.html>
2. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160613report.html>
3. 国際日本学研究所事務室保管の議事録
4. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160415report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160513report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20161230report.html>
5. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160801report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20170224report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20170306report.html>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

[出版物]

- ・本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』14を2017年1月に刊行した。国際日本学に関する一般的な研究成果報告5本、「アルザスシンポジウム2015：中心と周縁—搾取に抗う環境・自然」報告論文7本、本研究所が公募している若手研究者論文採用研究3本、第1回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞受賞論文1本、関連記念講演論文1本を掲載した。
- ・*Le Koré, Revue ivoirienne de philosophie et d'écriture, No 50* (2016年12月、谷崎潤一郎についてフランスで論じた、安孫子信“Une présentation d'Éloge de l'ombre de Junichiro Tanizaki”を掲載)
- ・『日本における中国小説及び伝説の受容学術会議論文資料集』(2016年6月、宮沢賢治の西遊記受容から生成した文学的成果と、日中比較文化的要素について論じた、王敏「宮沢賢治からの宿題—西遊記と孫悟空、そして禹へ」を掲載)
- ・『「東亜内部の自他認識」学術研究会論文集』(2016年6月、日本における禹王信仰の現存形態に関する調査研究の成果をのべた、王敏「日中相互の参照枠となる『禹王信仰』について」を掲載)
- ・『北東アジア外国語研究』(2016年12月、シルクロードの歴史文化の時空における日本とアジアと欧州の間の文化関係を論じた、王敏「中日仏とシルクロード及び相互の互惠関係」を掲載)
- ・『法政史学』86号(2016年10月、サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵の論語関係の典籍から分かる東西交流を論じた、小口雅史「在サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵世俗文書補訂(2)」を掲載)
- ・『法政史学』87号(2017年3月、フィンランド・ヨエンスー美術館所蔵の日本関係美術品を紹介した、小口雅史「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(1)」を掲載)
- ・『文学(隔月刊)』17巻4号(2016年7月、山東京伝の地方読者を分析して中央と鄙の関係論じた小林ふみ子「山東京伝の地方読者へのまなざし」を掲載)
- ・『太平詩文』70号(2016年11月、近世日本人の唐土への憧憬の事例を論じた小林ふみ子「鈴木芙蓉の唐土憧憬」を掲載)
- ・『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』(2016年6月、札幌華僑社会を築いた人たちを論じた、曾士才「日本残留中国人」を掲載)
- ・『小金井論集』(2016年3月、法政大学大学院国際日本学の授業で大学院生とともに日本の絵本を読む授業実践について述べた横山泰子「日本の絵本を非日本語で読む」を掲載)
- ・『ユリイカ』2016年6月号(歌舞伎にみえる妖怪から呪術・演劇・遊びなどについて論じた横山泰子「歌舞伎の妖怪」を掲載)

[学会発表等]

- ・“Bushido et le Japon moderne— NISHI Amane et NITOBÉ Inazo” (2016年3月15日、コートジボワール、フェリック・ス・ウフェ・ボアニ大学で開催された安孫子信の講演会で、武士道と現代日本の関係について述べた)
- ・「民俗文化と美しい郷：2016年嘉興端午国際学術研究会議」(2016年6月9日、中国で開催された王敏の基調報告「民俗学と美しい故郷との相関関係」で、日本における禹王信仰の現存形態を事例に、比較民俗学およびその参考価値について述べた)
- ・“LIAS(Leiden University Institute of Area Studies) Lecture Series” (2016年11月11日、オランダ・ライデン大学での小林ふみ子の講演“Localism in the 19th century”で、19世紀日本のローカリズムについて述べた。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※その他、専任所員及び各兼担所員の法政大学学術機関リポジトリに多数の業績が掲載されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物本体および学会配布資料
- ・法政大学学術機関リポジトリ

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。

- ・横山泰子氏の法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの実践的な絵本研究が、絵本学会の雑誌『絵本 BOOKEND』2016 号の「絵本研究の動向」に取り上げられた

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・出版物本体

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

本研究所では、大規模プロジェクトである COE の終了後は、特別な第三者評価は導入していない。その代替措置として内部評価の充実をはかってきた。ただし所員の負担を考え、評価のためだけの新しい組織を作るのではなくて、毎月の運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫してきた。そこでは各研究プロジェクト代表からなされるさまざまな研究成果報告に対して、毎回、その検証評価の議論を、議題上も別途明記して行っている。この方式は以前の大学評価委員会からも認めていただいたので、当面この方式で、引き続き充実させていきたい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・国際日本学研究所事務室保管の運営委員会議事録

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

・2016 年度中応募分（すべて科研費、5 件）

基盤研究(C), 王 敏, 日本における禹王信仰の現存形態及び現代のその意義

基盤研究(A) (海外学術調査)、菱田 雅晴, 現代中国における腐敗パドックスに関するシステム／制度論的アプローチ

基盤研究(C), 伊藤 達也, 脱ダム後の地域計画に関する地理学的研究

基盤研究(B), 小林 ふみ子, 近世後期における江戸狂歌流行の社会文化史および文芸史的意義の研究—四方真顔を軸に

基盤研究(C), 米家 志乃布, 民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究

・2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（すべて科研費、本研究所兼担所員を代表とするもの 9 件、分担者 1 名）

基盤研究(C), 安孫子信, 西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する, 900,000 円

基盤研究(C), 米家志乃布, 19 世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究, 700,000 円

基盤研究(C), 山本真鳥, 太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に, 1,100,000 円

基盤研究(C), 川村湊, 中南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究, 900,000 円

基盤研究(C), 村田晶子(代表)・山田泉(分担), 人類学の理論的枠組みを応用した日本語学習者のフィールドワーク教育, 900,000 円

若手研究(B), 大塚紀弘, 資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究, 900,000 円

基盤研究(B), 小口雅史, 物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究, 3,200,000 円

基盤研究(B), 小口雅史, 諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新, 3,200,000 円

基盤研究(B), 山中玲子, 能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究, 3,900,000 円

基盤研究(B), 宮本圭造, 能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究, 1,800,000 円

・同上（すべて科研費、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの 10 件）

基盤研究(S), 小口雅史, 木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報取集約と知の結集, 300,000 円

基盤研究(B), 小口雅史, 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究, 2,615,000 円

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>基盤研究(A), 菱田雅晴, 中国抗議型維権活動拡大のメカニズム: 認知の解放・支配方式の転換・動員手段の多様化, 400,000円</p> <p>基盤研究(B), 安孫子信, ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の確立, 150,000円</p> <p>基盤研究(B), 小林ふみ子, 大小摺物(絵巻)の美術史及び文化史に関する総合的研究, 300,000円</p> <p>基盤研究(B), 山中玲子, 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究, 30,000円</p> <p>基盤研究(A), 山中玲子, 伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究, 100,000円</p> <p>基盤研究(B), 宮本圭造, 熊本県山鹿市の歌舞伎(式)劇場・八千代座に関する総合的史料研究, 100,000円</p> <p>基盤研究(B), 宮本圭造, 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究, 30,000円</p> <p>基盤研究(B), 大塚紀弘, 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究, 40,000円</p> <p>三菱財団学術研究助成 横山泰子・小林ふみ子・米家志乃布, 近世日本における〈北方〉イメージ—絵地図とテキストに探る多様性の研究, 1,000,000円</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究開発センター提供資料による</p>
--

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・第2回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の公募・審査・顕彰。第一回に続き、世界各地から多数の応募があり、これまでほとんど知られていなかったオーストリア人写真家Stillfriedの幕末明治維新期の撮影写真を扱ったガートラン氏の“A Career of Japan”を得ることができたのは大きな国際的成果であった。第1回同様、田中総長とクライナー先生の出席を得て、表彰式と記念講演会を開催したが、学内外から多数の参加者があった。 	2.1 ①
<ul style="list-style-type: none"> ・2016年7月に『情報共有の会』を開催し、ブランディング事業をどのようなテーマでどのように構築していくのかについて、エコ地域デザイン研究センターと合同で検討に入った。 ・以後2017年3月に至るまでの間に計4回のワークショップを開催し、テーマを「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」と最終的に決定。 ・それを構成する研究チームとして「基層構造としての水都」、「江戸東京の「ユニークさ」」、「テクノロジーとアートからみた現代東京」、「都市東京の近未来」という四つを選定して具体的研究に入っていく態勢を整えた。 	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> ・大型プロジェクト実施のための資金獲得 <p>すでに2016年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メンバーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。しかし法政大学憲章を踏まえて、2017年度の私立大学研究ブランディング事業への応募に漕ぎ着けることができ、それが採択されれば、国際日本学研究としての江戸東京学が確立されることが期待されるし、万一採択されなくとも、応募の準備過程で繰り返し開催されたワークショップの経験が、今後の研究所の活動の基礎となっていくことが期待される。</p>

【この基準の大学評価】

<p>国際日本学研究所では、学内における定期的なワークショップのほか、国際シンポジウム、環境・自然研究会主催講演会、共催講座などを開催することにより、活発な研究と情報発信がなされている点が評価できる。</p> <p>また、本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』14の刊行のほか、学内外の学術誌に多くの研究成果が発表されている。</p> <p>科研費等外部資金については、本研究所兼担所員を代表とするもの9件、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの10件、その他、三菱財団学術研究助成など、研究に関する外部資金の獲得が積極的になされている点が高く評価できる。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

研究所に対する外部からの組織評価については、COE 終了後は導入されていないが、内部質保証体制の充実と合わせて、検討を行うことが期待される。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		大型プロジェクト実施のための資金獲得…すでに 2015 年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メンバーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。法政大学憲章を踏まえて、2017 年度の私立大学研究ブランディング事業への応募が強く求められているので、それに応じた態勢をしっかりと固めていきたい。
年度末報告	執行部による 点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・2017 年度私立大学研究ブランディング事業申請に向けて、共同申請母体となるエコ地域デザイン研究センターと早い段階から連携をとっている。具体的には申請に当たって主要な役割を果たすことが期待されるメンバーを中心に、合同で3回のワークショップを開催し、申請テーマ、具体的な研究内容、チーム分け、予算案、成果の取り纏めと公表の仕方にいたるまで、かなり具体的に詰めている。 ・テーマとしては田中総長のもとでの法政大学のブランドとしてふさわしいと考えられる「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」を設定し、水都、江戸東京の希少性、現代東京といった分野ごとに研究チームを結成し、取り組んでいくことで合意された。 ・この案件の骨子についてはすでに1月26日(木)開催のサステナビリティ実践知研究機構会議および1月27日(金)開催の研究総合本部会議で承認されている。 ・「国際日本学」の確立については、引き続きアルザスの欧州日本学研究所などでの国際シンポにおいて、上記ブランディング事業を中心に今後研究所が取り組むべき課題について外部の意見を取り入れながら検討を続けている。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

国際日本学研究所では、課題として指摘されていた「国際日本学」の確立について、エコ地域デザイン研究センターと連携しつつ、法政大学のブランドとしてふさわしいと考えられる「江戸東京 研究の先端的・学際的拠点形成」をテーマとして設定し、具体的な研究内容、チーム分け、予算案、成果の取り纏めと公表の仕方にいたるまで、具体的に詰めている。また、アルザスの欧州日本学研究所などでの国際シンポにおいて、今後研究所が取り組むべき課題について外部の意見を取り入れながら検討を続けている点も評価できる。

【大学評価総評】

国際日本学研究所では、前年度の指摘を受け、「法政大学憲章」が示す方向性の中で「国際日本学」を位置づけるための取り組みとして、今年度、エコ地域デザイン研究センターと連携して、2017 年度私立大学研究ブランディング事業に申請した点は評価でき、実現されることを期待したい。

また、科研費等外部資金の獲得についても積極的に取り組まれており、今年度もそれが継続されることが期待される。

COE 終了後、特別な第三者評価は導入されていないということであるが、所員に過度な負担とならない範囲で組織的な取り組みを再考されることに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。